対談

沖縄の歴史、文化から見るこれからの沖縄

沖縄総合事務局長 能登靖 × 琉球大学名誉教授 高良倉吉

沖縄総合事務局では、対談企画として「沖縄の歴史、文化から見るこれからの沖縄」をテーマに、琉球大学名誉教授の高良倉吉先生と能登靖沖縄総合事務局長との対談を行いました。高良先生から大交易時代の琉球などについて話を伺いこれからの沖縄についてメッセージをいただきました。

つくるもの、残すもの

能登　沖縄が日本に復帰して45年を迎えました。政府は5次にわたり特別措置法を制定し、沖縄振興に取り組んできました。私自身も5年前に行われた法律改正に関わり感慨深いものがあります。当時、アジアとの交流、大交易時代をもう一度現代に甦らそうという議論があり、法律の中に国際物流特区の制度が盛り込まれました。あと5年で沖縄振興も半世紀を迎えますが、過去を振り返りながら、今後10年、20年先の沖縄についてお話しをお聞かせいただければと思います。

高良　私自身、小さな島で生まれ育ったものですから、復帰前の離島の生活の大変さというのは今でも記憶に残っています。この45年で随分変わりました。かつてダムの整備が遅れていた時代には、断水による給水制限が頻繁にあり、不便を余儀なくされていたこともありました。今は観光が順調ですが、水源確保や道路などの社会インフラ整備が進んだことも大きな要因だと思います。

能登　沖縄は豊かな自然や歴史を有する地域です。インフラ整備を進める側としては、古くて良いものを大切に残しながらということを常々感じています。

高良　亜熱帯の自然環境はデリケートです。一切手を付けないということができればよいのですが、県土面積には限りがあり、地域で生活する人にとっては、利便性の向上や生活基盤の整備は必要です。何に手をつけて、何を守るのか分けて整理した上で、いかに環境に負荷をかけず開発していくか知恵を出すことが大事です。環境保全と経済活動の両立は不可能ではなく、そのための知恵を皆で出し合っていくことが大切だと思います。

沖縄のもつ多面的な魅力を人々に

能登　沖縄の観光は非常に順調で来訪者はハワイを抜いたという数字もあります。沖縄の魅力としてよくあげられるのは、美しい海や自然などリゾートとしてのイメージですが、

高良倉吉（たから・くらよし）

伊是名村出身。琉球大学名誉教授。専門は琉球史、特に琉球王国の内部構造、アジアとの交流史を研究。昭和46年愛知教育大卒、平成5年「琉球王国史の基礎的研究」で文学博士（九州大学）。沖縄史料編集所、沖縄県立博物館、浦添市立図書館長を経て、平成6年琉球大学教授、平成25年、26年沖縄県副知事。首里城復元委員、NHK大河ドラマ「琉球の風」監修者

歴史文化なども非常に個性的、魅力的なものがあるように感じます。

高良　観光客の増加は喜ばしい限りですが、滞在日数が少なく、沖縄の多面的な魅力にまだまだアクセスできていないと感じます。沖縄には、琉球時代から培われてきた文化や芸能、伝統行事が各地域で受け継がれ、今でも暮らしの中に息づいています。広大な海域に個性豊かな島々が点在し、沖縄本島とは違う島独自の方言や行事も残っています。島々で語り継がれる歌や踊り、伝統行事や祈り。沖縄自体が非常に厚みのある、奥行きのある社会です。沖縄に来られる多くの方々にこうした魅力をもっと知ってもらいたい、体感してもらいたいと思います。

島々で捧げられる女性たちの祈り

能登　伝統行事や祈りの話がでましたが、沖縄には人々の祈りの場所である拝所がとても多く驚きます。何か理由があるのでしょうか。

高良　人々が暮らす集落のことを方言ではシマと言ったのですが、それぞれのシマでは複数の聖域があり、そこで女性たちが祈りを捧げていました。この場所が御嶽です。水不足や台風など沖縄は自然環境の厳しい土地です。神に祈りをささげ、米をつくり、魚をとる。収穫や漁が無事終わると神へ感謝する。集落の数だけ年中行事があり、それに対応する聖なる場所がある。首里城ではこれら各地域で行われていた行事を総括したものが行われ、斎場御嶽は聖なる場所の頂上に位置するものでした。城（グスク）というとどうしても政治や軍事拠点のイメージですが、沖縄では聖域でもあり、首里城には女性たちが祈りを捧げる極めて重要な場所がありました。

海洋国家を支えたもの

高良　沖縄には神々に捧げた歌が多く残っています。「おもろさうし」という古い歌集がありますが、圧倒的に多いのが航海の無事を祈る歌です。海洋文化を支える精神世界を見事に表現しています。

能登　大交易時代、琉球の人たちは進貢船で、遠く中国、日本、東南アジアを往来したと聞きます。

高良　進貢船は中国から導入したジャンク型の船で、当時世界で最も優れた技術で建造されたものでした。それに匹敵するのはアラビア海で使用されていたダウ船です。大交易時

対談

沖縄の歴史、文化から見るこれからの沖縄

沖縄総合事務局長 **能登靖** × 琉球大学名誉教授 **高良倉吉**

代を支えたのは、造船技術、操船技術、気象や天体の知識など最先端の技術だったと考えます。女性たちを中心とした祈りや精神世界が非常に豊かであったと同時に、大海原を越えて移動する技術を豊富に有していた。技術、知識、精神、人材などすべて備えていたからこそ、小さな国が世界を相手に交易することが可能になったのだと思います。

琉球の時代に見るこれからの沖縄

能登　琉球王国時代には、中国から多くの技術者、知識人が来訪し、久米村に定着し、貿易実務や国家経営などを担ったと聞いています。

高良　当時中国は世界で最も繁栄し力のある国家の1つでした。中国の福建から渡ってきた人が多いのですが、福建は中国の中でも、高い造船技術や航海術を有する地域でした。福建を中心とする人たちがやがて琉球に定着するようになります。当時の琉球は中国から大学の留学枠も認められていました。久米村の子孫たちが、中国に留学し技術や知識を習得して沖縄に戻り、貿易実務に関与したり、琉球王国の中枢で国家経営にも関与するようになります。日本本土からも禅宗の僧侶を招きます。僧侶は当時の知識人で外交アドバイザー的な存在でした。そのような人材を活用して、日本本土との外交や貿易を行ったのです。

能登　今の話を聞いていると、これからの沖縄の可能性が見えてくるような気がします。

高良　中国や日本本土から移り住んだ人たちは、やがて琉球の社会に溶け込み、この地域の発展にどういうふうに力を尽くすかと使命感を持つようになります。僕はいつも言うのですが、ウチナーンチュという言葉は、なにも血のつながりだけをいうのではない。この地域に住み、この地域を面白くする、この地域に参画し、この地域の発展に寄与する人すべてをウチナーンチュというのだと考えます。大交易時代、アジアに羽ばたいた時代に琉球がそれをやっていたのですから。

能登　琉球の時代は外に開かれ、他の地域や国から沢山の人を受け入れ、発展してきたということですね。これからの沖縄の発展を図る上でもとても重要な点だと思います。高良先生本日は大変お忙しい中、たくさん示唆にとんだお話をお聞かせいただきました。どうもありがとうございました。

能登　靖（のと・やすし）

富山県出身。沖縄総合事務局長。昭和63年京大卒、通商産業省入省。平成22年内閣府参事官（沖縄政策・産業振興担当）として沖縄振興特別措置法改正に携わる。平成24年沖縄総合事務局経済産業部長、平成26年NITEバイオテクノロジーセンター所長、平成28年より現職